



左隻 (106.0×281.0cm)

## 「洛中洛外図小屏風」(六曲一双)

江戸時代前期  
史料館・学芸員資格取得事務室資料

I 期

洛中洛外図は、安土桃山から江戸時代にかけて都を治める覇者たちの権威の象徴としてしばしば製作されました。織田信長が自ら統治する京の町を狩野永徳に描かせ、上杉家に贈ったという史実は有名です。一方、京の名所における庶民の遊興風景に主眼がおかれた洛中洛外図も描かれました。『京童』や『京雀』など、江戸時代前期に京都の名所案内本が数多く刊行されたのとほぼ軌を一にして富裕な庶民層の需要に応えた洛中洛外図が製作されます。

本図は、後者の一例であると考えられます。右隻は、三十三間堂からはじまり、方広寺大仏殿、清水寺と続き、画面下方には四条河原の芝居小屋、左端には祇園社が大きく描かれています。左隻に目を移すと、二重の回廊に囲まれた北野天満宮の社殿が堂々と描かれます。さらに北野社頭で野外飲食を楽しむ人や、参道にある「影向松」付近で踊りを楽しむ人々が描きこまれ、北野社が左隻全体の主題であることがわかります。城や御所などは描かれず、庶民にとってなじみ深い名所と、そこで催される歌舞伎、見世物小屋、湯立神楽、遊行風景などが詳しく描写されています。こうした主題選択や小屏風といった形態から、本図が庶民の需要にこたえた製作であることが推察されます。

時代が降るにつれて洛中洛外図の中から、特定の景観や場面のみが独立し、「北野社頭図」「四条河原図」「阿国歌舞伎図」などの新たな主題が生まれました。本図は、洛中洛外図のスタイルを残しつつ、いくつかの名所をクローズアップした過渡期の作例といえるでしょう。

(助教 鎌田純子)



寺社の前で手を合わせてお参りする人の姿がしばしば描かれているので、ぜひ探してみてください。庶民が京都見物や屋外遊びを楽しむ様子が見どころです。



この掛軸、形態にも注目してみてください。実際にご覧ただくと、一般的な掛軸より少し大きく感じませんか？ もともとは違う形で作られたものなのです。この大きさからも、実は洛中洛外図屏風の図の一枚(一扇)だったものを掛軸の形に仕立て直した、珍しい形態のものであることがわかります。



右隻 (106.0×281.0cm)

## 「洛中洛外図掛軸」(一幅)

江戸時代前期  
学芸員資格取得事務室資料

I 期

本図に描かれているのは、内裏とその東側を中心とした、いまも有名な京都の名所ばかりです。

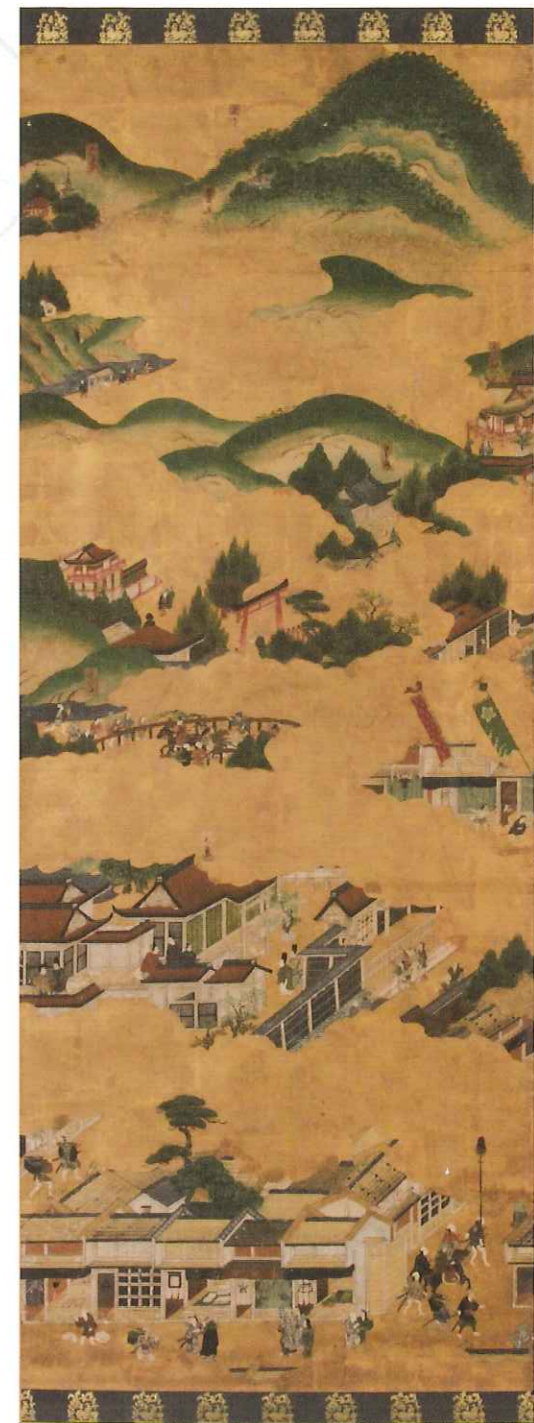
図の上部左側には、遠く鞍馬寺の本殿と多宝塔、その下には名産の火打石を藁かごに入れて川を渡して売る「畚おろし」の様子が描かれています。さらに下った画面中央付近の鳥居と社殿、そして駆け抜ける2匹の馬と歓声を上げる人々は、賀茂別雷神社(上賀茂神社)の競馬神事の盛り上がり伝えます。右手には、百萬遍(知恩寺)の本殿と、吉田神社の特徴的な八角形の社殿。都の中心である内裏と、商店が立ち並ぶ賑やかな町の様子は、手前側に大きく生き生きと描かれ、それぞれの場所に生きる人々の風俗がよく表わされています。

米国フリーア美術館所蔵の洛中洛外図屏風の六扇目とほぼ同図であることから、もとは六曲一双の屏風の右隻六扇目の図であり、洛中洛外図としては真野家本の流れをくむものと考えられるでしょう。

掛軸の形に仕立て直されたこの資料は、現在、学芸員資格取得のための授業や実習など、学生教育にも使われています。

(学芸員 吉廣さやか)

政治と貴族文化の中心である内裏には、衣冠を身に付けた人々が…。門の外から興味深そうに内裏を見ている人々の姿も見えます。



全景 (本紙: 146.0×56.1cm)